

知事と県民の意見交換会（山本地域振興局）議事要旨

- テーマ：若い力で地域活性化に取り組むために
- 日時：令和元年7月8日（月）15：15～17：15
- 場所：砂丘温泉ゆめろん

知事挨拶

大変お忙しいところ参加いただき感謝する。

毎年各ブロックで様々な方から話を聞いている。知事と県民との意見交換はずっと前から実施しているが、昔は市町村長や農協の組合長など各団体の長と意見交換していた。

各団体の長との話もよいのだが、そのような方とは別にも機会があり、組織の意見は聞こえてくる。それは制度を作ったり、県政に反映するのには良い機会ではあるのだが、運用となると現場の声が必要であり、それは上がってこない。私が知事になってからは現場の方の声の話を聞き、机の上でものを考えがちな県庁に、実際に現場での農業、福祉などいろいろなテーマで意見交換する機会を設けている。今日は移住・Aターンをテーマに若い方で地元に戻り、新しい仕事や家業を継ぐなど、頑張っている方を代表して皆さんに現在取り組んでいること、これから目指すこと、その上での悩みなど、様々な制度に今回の意見を施策や制度設計、運用など全県の意見の中で共通した課題などは反映していけるものもたくさんある。

知事だと構えず、遠慮なく声を聞かせてほしい。また、このような機会が集まると同じ目的で一度も話したことがない人の場合がある。県北ではお菓子作りに比内地鶏の卵を使いたいという方と比内地鶏農家がこのような機会にマッチングできたケースもあった。

この機会は行政とのつながりにもなるが、皆さん同士が知り合い、活動のネットワークとして地域活性化のグループにもなり得る。本日は皆様のいろいろな意見を聞いて、自分なりに考えることがあれば、皆さんにお聞きしたいと思うので、よろしく願います。

参加者自己紹介

（局長）

それでは、さっそく意見交換会に移る。今知事の挨拶にもあったとおり、ここに集まった方は何らかの形でAターンしてきた若い方々であり、「若い力で地域活性化に取り組むために」を本日のテーマとしている。

秋田県は人口減少、少子高齢化が大きな課題であり、ここ能代山本も同じだ。進学や就職による若者の県外流出が問題な中で、皆さんは県外から移住や一度県外へ出て戻った方々である。県外での生活を経験した上で能代山本に根ざした活躍している方々だ。

若者の地元定着や地元回帰に必要なだと思っていることなどをざっくばらんにお話しいただきたいと思う。まずは、簡単に自己紹介をお願いしたい。

（A氏）

一昨年の8月に夫と夫の妹と合同会社SUN農園を設立し、その後能代市柳町に農家カフェ「アグリコッペ」をオープンした。夫婦で農業をし、妹がカフェを担当して、地元で作った野菜を地元の人に食べてほしいという思いでお店を始め、家で作った野菜の産直や

その野菜を使ったランチ、コッペパンなどを販売している。

新潟県柏崎市出身で、大学で京都へ行き就職した。その仕事の転勤で能代に来て3年ほど住んだ。その後結婚し、京都から夫の実家でもある能代へ移住してきた。

最初は農業をするつもりはなかったが、夫の実家が農家であり、夫が農業を始めたいと希望したため、3人で会社を設立した。長ネギの栽培をしているが、まだ農業は初心者で、勉強しながら夫と二人で頑張っている。来年はサテライト型園芸拠点を始める予定で、その準備をしながらネギ栽培をしている。

(B氏)

生まれも育ちも八峰町で、大阪の大学に進学し、就職で千葉に行った。大学、社会人通算で約9年県外で生活し、3年ほど前に八峰町に戻ってきた。結婚と子供の誕生を機に、秋田での子育てを希望し、埼玉県出身の妻と家族でこちらに戻った。

最初の仕事は八峰町の地域おこし協力隊として、移住や空き家の活用などに取り組み、去年の春に任期が終了したので、新しく一棟貸しの1日1組限定のコテージを始めた。コテージの運営をしながら、リノベーションやリフォームのデザイン・施工を地元の職人と一緒にやっている。コテージの運営と建築関係の2本立ての仕事を始めて1年ちょっとになる。

(C氏)

今年の4月まで藤里町の地域おこし協力隊と活動していた。「とんじこんじ」という雑誌を協力隊のときから作っていて、現在は個人事業主として、今年も藤里町からの依頼を受けて作成している。

他にもBさんと一緒に、コテージ宿泊者限定のお酒のラベルをデザインしたり、去年は県庁の仕事としてタオルのデザインをさせてもらった。デザイン関係の仕事をしているが、秋田県には縁もゆかりもないが、「とんじこんじ」の作成に興味があり、東京から移住した。出身は宮城県の塩竈市である。

(B氏)

山本合名会社にコテージ宿泊者限定のお酒を作ってもらい、そのラベルをCさんにデザインしてもらった。

(D氏)

三種町で酪農をしている。高校卒業後、神奈川県のある大学に進学し、臨床検査技師の資格を取得して秋田に戻ってきた。潟上市で4年ほど病院に勤務してから実家に戻り、酪農を継いでいる。今の主な仕事は毎日の牛への餌やり、人工授精、獣医の治療サポートなどを行っている。春から秋にかけて一番忙しい牧草の収穫作業を頑張っている。

(知事)

(進学先とは) 全く違う仕事をしているのだな。

(局長)

Dさんは一旦違う仕事に就職しながら、家業である酪農を継いだ方だ。

(E氏)

ミナトファニチャーという注文家具屋をしている。高校まで能代におり、大学進学で東京に行き、その後20年ちょっと関東にいたが、2年半ぐらい前に能代に戻ってきた。ずっと横浜で注文家具の製作をしながら、横浜市役所と水源林の活用をしたり、企業のCSRでいろいろな山に行き、木を使って楽器を作ったり、子供向けのワークショップなどを行ったりと家具作り以外にもいろいろな活動をしてきた。

帰ってきた理由はいろいろあるが、製材業者の同世代の人たちから、少し下火になってきた木材業界を盛り上げたいとの声をかけてもらい、商品開発も数年してきた。能代に戻ってきて、業界も林業も盛り上げていきたいと思って活動している。

昨年秋田銀行のビジネスプランコンテストで優秀賞をいただき、能代初の家具ブランドを「MOKUTO」という名前で展開していこうとしており、商品開発やいろいろな準備をしている最中だ。

いろいろな活動をしている一つに、大館の曲げわっぱの捨てられる端材を使ってピンバッチを作っている。これを持っていることで、秋田の曲げわっぱのことや天然杉のことをいろいろな方に伝えられるツールになればいいと思って作っている。今後全国のいろいろな問題を抱えている地域でも同じような活動ができればと思っており、今進めようとしているところでは、岩手県の浄法寺の漆の木の文化を伝えていこうとしている。そうしてつながるツールとなっていけばと思っている。ちなみにこのピンバッチは鳥海山の神代杉で作ったものである。

(知事)

もともとの専門は何になるのか。

(E氏)

もともとは設計の仕事を数年していて、その後に木製家具作りを図面を引くところから制作まで全部やっている。

(F氏)

横手市で生まれ、秋田市で育ち、今は三種町で地域おこし協力隊をしている。秋田市の高校を出て、東京の大学に進学したが、そのときに5年ぐらい俳優の仕事をしていた。その後、保育士の資格を取って、東京で4年間保育士をしていた。また、東京で東北をPRするWEB番組を制作するディレクターのような仕事もしていたが、その番組のスポンサーが三種町であり、保育士を辞めようとしていたときに地域おこし協力隊の話があると聞き、去年三種町へ移住してきた。

今は三種町役場の企画政策課で移住・定住の仕事をしており、空き家バンクの管理を主に担当している。また個人的に「湯沢晃平の三種生活」という名で毎日ブログを更新しており、確か今日で435日目となる。3年間の任期で1,000日を超えたいと思っている。また「東北わくわく情報局」という番組に出演して三種町や秋田県だけでなく、東北を伝える仕事もしている。

仕事ではないが、ボクシングが好きなので、三種町をボクシングの町にするよう活動している。いつか近いうちにクラウドファンディングで三種町にボクシングリングを作って、町の宝である三浦隆司さんに協力いただきながら、やっていきたいと思っている

意見交換

(局長)

まず、元も含めて地域おこし協力隊の方が3名いるので、その方々から地域おこしに取り組んでの感想や地域おこし協力隊の方が地域に残るために必要なことなどをお話しいたきたい。最初は宮城県塩竈市出身で藤里町に移住したCさんをお願いしたい。

(知事)

塩竈市と藤里町では全然町のイメージが違うと思うがどうか。

(C氏)

確かに全然違う。塩竈は海の町で港がすごい近くだったが、藤里は秘境と呼ばれるような山の町。おじいさん、おばあさんが多く、最初は町を歩くとあの人誰だろうと上から下まで見られるような感じだったが、だんだん顔を覚えてもらい、野菜をもらったり、藤里町に来たときはまだ車の免許を持っていなかったが、買物に行くときに乗せてくれたりなど、人の温かさに出会えた。飲み屋に通うようになると、若い人にも出会えて、みんなで何やるかという話もできてきた。この「とんじこんじ」も若い人たちみんなの意見を集めて作っている。

デザイナーの仕事をしているが、ポスターなど東京ではまかせてもらえないような仕事をまかせてもらえるのがうれしいのと、責任感が生まれ、応援してもらいながら頑張りたいと思えた。仕事が面白いことが、ここに残った大きな理由だ。

(局長)

Cさんにとって藤里町はふるさとではないのだが、どんなところになるのか。

(C氏)

町役場の人にはチャレンジしてみようという方が多い。自分自身もチャレンジできる場所という感じ。人口が減っていて暗いイメージがあるかもしれないが、自分にとってはチャレンジできる、明るい町だと感じている。

(局長)

この「とんじこんじ」という雑誌を読んで、藤里町という小さな町だからこそできることがこれだけあると感じて、それが藤里町に残っていただいた理由のように思った。

(知事)

この雑誌は、藤里町の経費で作っているのか。

(C氏)

そうだ。

(知事)

何部ぐらい発行しているのか。

(C氏)

2, 500部発行している。基本的に全戸分と町外の方でも欲しいという方にはあげて

いる。

(知事)

このまま発行を続けていくと、そのうち全員が雑誌に載るのではないか。

(C氏)

そのとおりで、全員が載ることを目標にしている。

(知事)

これは秋田市では無理だ。これを見ると、我々のイメージする藤里町と全然違って、ナウい町に見える。その辺が面白い。ところでどこに住んでいるのか。

(C氏)

町内に平屋の一戸建てを借りて住んでいる。

(局長)

次に同じく地域おこし協力隊を経て、八峰町でコテージを経営しているBさんに伺いたい。

(B氏)

自分は生まれ育った八峰町に地域おこし協力隊として帰ってきた。県内の地域おこし協力隊でもあまりないケースだと思うが、もともと知り合いも多く、土地勘もあるため、活動のスタートもスムーズだったし、とても活動しやすかった。当初、八峰町では地元出身者の協力隊採用は不可だったが、役場の担当者が自分の建築の仕事や空き家を改修したいという話を聞き、採用範囲を拡大してくれたおかげで地域おこし協力隊になることができた。県内の他市町村でも自分のような県外へ出て経験や知識を習得後に戻るケースにも対応してくれたらよいと思う。そのような人が一人いると、知り合いも多いので他の協力隊メンバーと地域の方々とのつなぎの役割も果たせるので、他市町村でも制度的に申込みを可能にする柔軟な対応をしてほしいと思う。

自分は生まれ育った町であり、当初から残ることを決めて活動していたため、迷うことなく準備できたことが今の仕事につながっていると思う。

自分が今の仕事ができているのは、職人の方との出会いが一番大きく、その方は自分の兄と友人だった。高校までは4つ年上であり、面識がある程度だったが、その方が地元で大工や製材の仕事が続け、職人として研鑽を積んでいた。自分は建築の知識はあるが、技術はなく、彼は技術はあるが幅を広げる上でのパートナーがいなかった。自分が企画や宣伝などを担うことで、協力を得ながら協力隊の仕事を進めた。それが今の仕事につながり、コンビでリフォーム工事を請けたりできている。協力隊の人は一人で頑張らずに、自分に無い能力を持った地元の人などと出会えることが大事だと思う。役場や県の方は、地域おこし協力隊にそのような出会いの機会を作ってあげるとよいと思う。

(局長)

貴重な意見をいただいた。地域おこし協力隊の方に無いものを互いに補うような形の出会いを作ってあげることが、行政に求められる部分ということか。

(B氏)

そうだ。自分は今もともと知り合いが多いため、まわりからの紹介もあったが、他から来た協力隊の人だとなかなか難しいと思う。そのため役場の職員がしてくれるとうれしいと思っている。

(局長)

3人目、横手出身で秋田育ち、今は三種にいるFさんはどうか。

(F氏)

自分は地域おこし協力隊として1年半ぐらいで移住・定住の仕事をしているが、その仕事以外にもいろいろな仕事をやらせてもらっていて、自分としては充実している。

移住・定住の仕事についてだが、移住・定住というとハードルが高いため、まずはハードルを下げて、関係人口の創出に力を入れている。その点で三種町は今年の2月から、三種ファンフェスタを首都圏で開催している。第1回は能代市出身のゴスペルシンガー塚本タカセさんに三種町でゴスペル教室をしている縁から、東京でゴスペルをきっかけに三種町を知ってもらおうイベントを開催した。先月第2回を横浜で開催したが、ボクシングをテーマに三浦隆司さんに参加してもらい開催した。今はこの2回のイベントに参加した方向けに三種町ツアーを企画中である。

(局長)

三種ファンフェスタは、どのように首都圏の方に周知しているのか。

(F氏)

今はSNSを使っているほか、広報に掲載したり、マスコミに情報提供したり、三種町出身の東京在住者への声かけなどして、1回目が30人ほど集まり、2回目は50人ほど集まった。初めて三種町を知った、じゅんさいを知ったという方も多かった。移住の前の段階として三種町のファンを作る取組をしているのだが、やはり魅力的な所に人は集まると思うし、三種町には若い人で活躍している人もいる。移住・定住という外の人への発信に向きがちだが、地道ではあるが、まずはこの地域にいる人が魅力的な活動を行っていくことが、結果として外の人からこの町は面白そうと興味を持ってもらえるのではないかと考えている。自分もそのための狼煙を上げたいと思っている。

(局長)

次はAターンでこの地域で頑張っている3名の方からお聞きする。若者が経営拡大などチャレンジする上でどのような支援があるとよいか、自身の経験も踏まえてお聞きしたい。

(A氏)

現実的なお金の話になるが、能代市は補助金の制度がいろいろあって、それを活用して経営している。新規就農で始めたため、今でも補助金はもらってネギの栽培をしている。お店の方も中心市街地活性化の取組として、柳町の空き店舗を活用して出店したため、2年間の家賃補助があり、利用している。店舗リフォーム費用も補助金を活用した。そのような制度を活用して起業した。

なぜ起業したかであるが、移住してきて仕事を探したが自分が働きたいと思える所が見つからず、一度起業を考えたが妊娠・出産もあり、そのときは諦めた。その後、夫が仕事

を辞めて農業をしたいと考え、妹もいずれはお店を開きたいという思いがあったため、3人で農業をしながら、お店をするような会社を設立した。始めるに当たり、誰かが働きたいと思える農業やお店にすることを共通の目標とした。

始める上で困ったのは、やはり費用面だったため、このような制度を利用させてもらった。せっかく始めたので長く続けたいと考え、若い世代と一緒にできる農業でなければ続かないと思っているが、農業はとても人手が必要なのに、働き手を見つけるのがとても難しいと実感している。農業はそれが一番の課題と感じている。

「アグリコッペ」の方も、能代でランチのお店として安定した売上げ、利益を出すことがこんなに難しいことなのかと実感しており、今後どう展開するのがよいか悩んでいるところだ。始めるときから、すぐに軌道に乗るとは思っていなかったし、大変な思いをするとは覚悟していたが、それでも始めようと思えたのは、やはり経済的な支援制度があったからである。

(知事)

御主人の実家はもともと農家なのか。

(A氏)

そのとおり、農家だ。

(知事)

ネギはどのくらいの面積に作付けしているか。

(A氏)

1町歩に作付けしている。

(知事)

ネギ以外も何か作っているか。

(A氏)

自分たちはネギ以外は栽培していない。両親も農業をしていて、そちらでトマト・キュウリ・じゃがいもなどいろいろ野菜を作っている。

(局長)

ネギの方は来年度、更に作付面積を増やす計画だ。ところで、能代市の支援制度はどのようにして知ったのか。

(A氏)

自分たちで調べた。市役所に行って聞いたり、夫がいろいろな情報を調べた。

(局長)

ネギ作りは初めてだったと思うが、技術的な支援もあったか。

(A氏)

技術的な支援は、今現在もいろいろな研修に参加したり、ネギ農家の先輩からのアドバ

イスなどもいただきながら勉強している。

（局長）

次は臨床検査技師を経て、今は酪農をしているDさんに、秋田に戻ろうと思った理由や酪農を継ごうと決意した理由などお聞きしたい。

（D氏）

臨床検査技師の資格を得て、秋田に戻ろうと思った理由としては、小さいときから親の酪農を見てきて、いつかは自分も酪農したいという思いがあったからだ。2年前に酪農の仕事を継いでみて、仕事は幅広いというのが実感だ。朝早くから夜遅くまでの仕事になるのだが、今は親から言われた仕事をこなしているような状況だ。若者にどんな支援が必要なのかということだが、経済的な支援などはどんなものがあるのか、何を利用したらよいか分からないと思う。こういう支援があると教えてくれればと思った。

（知事）

農協には入っているか。農協にはそのような情報はいつているはずだが。

（D氏）

農協には入っていて、自分は支援を活用しているのだが、あまり活用していない農家もあり、どうしてなのかと思った。新規就農や規模拡大する人などを見て、あまり支援制度が知られていないのではと感じ、もっとPRしてもらえればよいと思った。

（局長）

この間まで畜産振興課長をしていた身としては、耳の痛い話で反省したい。

（知事）

畜産については今県で重点的にやっており、いろいろな制度がある。

ところで、今は生産した牛乳はどこに出荷しているか。

（D氏）

秋田やまもと農協から森永乳業に生乳を出荷している。

（局長）

次にEさんにAターンの理由や支援について、他にも様々な活動をしているが、その活動を通して感じていることなどお聞きしたい。

（E氏）

横浜で13年ぐらい注文家具屋をやっていたが、もともとは原宿の設計事務所に勤めていた。年齢とともに人混みが嫌になり、横浜だが田んぼと畑しかない地域で家具作りをしていた。そのときから自然の木を相手に家具を作っているのだから、環境は大事だと思っていた。いつかは地元に戻って家具作りをしたいと思っていた。

8年ほど前に、何か地元でアクションを起こせないかと考え、いろいろ調べたが能代の情報がなく、大館のゼロダテプロジェクトに携わるようになって秋田に頻りに帰ってくるようになり、その都度能代に寄って横浜に戻るようになった。

また別に、組木プロジェクトというDIYで空間をリノベーションするという会社を裏方作業で手伝い、DIYで家具を作るキットを全国に発送する仕事も始めていたため、全国に発送するスタイルならば、仕事場はどこでもできると思った。そのような中で、能代に帰るたびに製材所を回り、地元の木のことをリサーチした。例えば能代春慶の復元活動など興味のあることをいろいろ活動して、能代の製材業界の課題なども自分なりに見えてきたため、微力ではあるが地元の人がチャレンジしていないことをやってみたいと思い、今思うと数年間が準備期間だったが能代に帰る機会が増え、子供も大きくなってきて引越しも大変になりそうだと考え、2年半前に戻ってきた。

Aさんも話していたが、能代市の移住者向けの支援が充実していた。足りない部分もあったが、市の担当の方が改善等対応してくれて良かった。行政に知り合いがいたということもありよかったが、同時期に帰ってきた友人からは制度が分かりづらいという声があったため、自分が教えたりした。

今は能代の駅前に家具工房を構えているが、関東に比べて固定費も安く、若い人がチャレンジして家具工房を持つには最適だと感じている。売るチャンネルがないなどもあるが、昔“木都”と呼ばれた能代、当時は製材した板を売っていたが、今風に解釈し、家具をしっかり作って販売するブランドを作ることによって、新しい“木都能代”を注目してもらえ、若い人が家具工房を構えてチャレンジしていける能代にしたいと思い、活動している。

(局長)

Eさんはいろいろな活動をしており、環境として能代はよいとのことだが、仲間作りはどのようにしているのか。

(E氏)

初めの頃は全く知り合いもいなくて、どこからどう仲間を増やしていったらよいか分からなかったが、能代春慶復元プロジェクトを能代市と一緒にやらせてもらい、毎年発表会があり、そのときに来ていた昔“木都能代”を支えていた先輩たちが若手の方につないでくれたおかげで、つながるようになった。

(局長)

能代の課題が見えてきたという話だったが、具体的に課題は何か。

(E氏)

各製材所、銘木会社によって違うと思うが、今まで和風建築に合った製材をやっていた街だと思う。今でも天井板の全国シェアが7割ぐらいあったかと思う。それが売れなくなっているために売上げが下がっている状態が、回ってみた所で見られる。それを新しい商品に生まれ変わらせる、天井板を違う使い方できるようにするデザイナーと結びつけられれば、もっと売れるのではないかと思っている。そのため、最近はデザイナーや建築家を能代に招聘して、原木や製材所を巡るツアーなども実施している。

(知事)

木材業界は川上と川下が途切れている。住宅を建てる時、家にあった家具となるが、今の住宅は無垢材を使用する家が多いが、それに合う家具はなかなかない。オーダーメイドになると、建築と家具と材料のネットワークがない。

(E氏)

隔月で木材関係者向けにトークイベントを開催しており、この前川上から川下へという話になったが、森林組合と製材所とのつながりが無いという話だった。自分たちはそれを伝えるのがプロダクトの価値だと思っているが、伝えられる人がいない。成功している商品を販売している人の話を聞くと、そこから一括してやっていたりする。それは能代の木材業界の課題かなと感じている。

(知事)

あとは同じ家具や建具でも最近では性能、耐火性能などで違ってくる。能代で今一番は、建具のドア、2社ほどある。金具なども最高のドイツ製の電子キーを使った秋田杉の建具など作っている。そこまでいくと地元では高いが、東京では売れる。総理官邸のドアは能代のものだ。リッツカールトンは大栄木工のものだが、1枚400万円だ。今ドアの良いものは1枚100万円は東京では普通だ。その辺が分かっていない。今の和風と昔の和風は違う。川上から川下まで、材料、加工、製品、出荷先、建築の流れ、それをマッチングするところが意外と能代にはない。

秋田市に行けば、製材とプレカットの設計士、デザイナーと一緒にやっている所がある。昔からの木材の街で、良い時代があったため、皆自分が大将という感じがする。誰かがコーディネートすると反発してしまう。

(局長)

Eさんは能登社長や腰山社長と面識はあるか。

(E氏)

能登社長とは何度か会ったことがある。

(局長)

Bさんは付き合いはあるか。

(B氏)

自分は銘青会など製材関係の若手の方との付き合いはあるが、2人とはない。

(E氏)

自分たちも銘青会と一緒に問題解決のような取組をしているが、木材業界もいろいろな団体があり、その団体間の交流がどうなっているのか分からない状態。いろいろな団体があり、同じような話をしているが、みんなバラバラに動いている。

(局長)

能登社長のところは別の団体だったかと思う。

(E氏)

そのとおり。こちらまで話がこない。とてももったいないと思う。

(局長)

外から見ると同じようなことをしているように見えるが、一本化するような話はないの

か。

(E氏)

何かしらの形で一緒になればよいと思っているが、現状はなっていない。

(局長)

Fさんが先ほど関係交流の話をしていたが、様々な若い方との交流もあるようだが、若者がまちづくりや地域づくりに主体的に参画するためにはどんなことが必要と考えるか。

(F氏)

自分の考えとしてまちが活性化するには、皆いいものを持っているので、そのモチベーションを上げるのが大事だと思っている。やりたいことがあっても生活もあり、抑えている所があるかと思う。先ほども言ったが魅力的なまちにするには、個々が稼げるまちにならないと続かないと思っている。稼げるまちにするには、補助金などの行政的支援はあると思うが、補助金には稼げるというイメージはない。それぞれが独立できるような仕組みを行政側で作ってくれればよいと思う。

自分のいる三種町企画政策課で、今年10月に全国で初めての取組、公共交通の再編がある。それは、町の人が町内の交通弱者を運ぶというものだが、どこの自治体でもやっていない。横手市狙半内地域の取組をモデルとした。このように行政側で仕組みを整えて、あとは民間や住民に任せるとなると、モチベーションにつながる。モチベーションが上がると自分たちでもっとよくしようと思ってくれるのではないかと考える。

それぞれが独立して稼げるまちになれば、もっと町の魅力が上がるのではないかと考えている。

(局長)

県や町が仕掛け人役に徹して、住民に何らかの形で主体性を持たせるということだ。三種町の取組だが、Fさんが携わっているのか。

(F氏)

自分はその部署にいるだけだが、三種町出身の橋本五郎さんもこの政策はすごく良いことだと話していた。自分の出身の行政側からこのような話が出ることはとても誇らしいとのことだった。

(局長)

今まで皆さんに一人ずつこちらから聞いていったが、皆さんから誰かお互いに聞きたいということはないか。

(B氏)

Aさんにお聞きしたい。能代市での飲食店経営に関心があり、人口や人通りなどから厳しいという話を聞いていたが、柳町では飲食店が増えていたりする。もう少し、立ち上げからの話を聞かせてほしい。秋田県で飲食業はとても厳しいと考えていて、飲食業は顧客数と単価で売上げの天井が決まってしまうと思う。高級なイタリアンやフレンチ料理店であれば1組でそれなりの売上げになるが、パンというみんなが手軽に買える商品でチャレンジしている姿がかっこいいと思った。ただ実際の所はどうなのか気になった。

(A氏)

始めるとき、夫の妹がパン屋で働いていて独立したいという思いがあった。あとは能代では大変だろうと思いつつ、自分のカフェ好きからカフェをやりたいという思い、それと夫と妹も農家育ちだが、よそでは農家カフェと結構聞くけれど能代にはないのでつくりたいという思い、ただやりたいという思いだけで行動に移ったのが実情。

大変なのは重々承知だったが2年間の補助金があるし、とりあえず2年間頑張っ、その後のことはそのとき考えればいいのかと思ひ始めた。

(B氏)

自分のように妄想だけしていても何も分からないが、行動するとどのくらいの人数が来てくれるなど、実際に分かるということがすごいことだと思っている。行動してくれる人がいると、後に続きやすくなるし、自分の思うカフェがないのでつくるという所から始まっているのも素敵だと思った。

農業法人でやっているのもポイントだと思う。1人でカフェを始めるとなかなか助け合うこともできないが、法人の中の1事業の形でやっている。個人でやるにしても別の仕事も有りながらカフェもやるというスタイルが、秋田には適しているように思う。おいしいコッペパンをいつもありがとうございます。

(知事)

飲食業は非常に難しい。ターゲットをどうするか、昔いろいろ関わったことがあるが、県南ではコンセプトを定めて、完全有機野菜を使った健康志向を売り物にした店などは、奥さん方が会話を楽しむ店がある。定食が1、2種類しかないが、そのような店は歩留りがよい。メニューは2種類ぐらい、コンセプトを健康にするとか、地元名産品をふんだんに使ったものにするなどで成功している所がある。

一般的にあとは、対象を地元の人とするか、観光客なのか。観光客は面白いもので、場所も必ずしも都市部が人が入るかというところと違う。例えば角館、自分の出身地だが、秋田市でフレンチレストランをやってもあまり売れないが、角館ではとても売れる。なぜかというところ、武家屋敷や歴史的な街には和食は合わない。鎌倉フレンチなどある。以外と若い女性が来る所は、お寺など歴史的な建物のある所も食べ物イタリアンやフレンチだったりする。これが面白い。秋田だから郷土料理かというところでもない。郷土料理は難しい。コストも高いし、手間がかかる。

どういうコンセプトでやるか、ネギをいっぱい使うなど、ネギの栄養素と健康を組み合わせるなど。先日、横手でも意見交換会を行ったが、あそこは発酵文化に取り組んでいるが、麴を使った発酵食品だけの定食がものすごくはやっている。そこではミートボールも塩麴の味付けだが、結構値段も高いのに若い女性がいっぱい来ている。どういうコンセプトで売ることがとても重要だ。

(B氏)

アグリコッペはパンがおいしい。中身がたくさん種類がありよいと思うが、結局パンがやわらかくて想像していたよりおいしかったので、頑張っていたきたい。能代ではコッペパン専門店が珍しいのでアグリコッペのファンだ。

(局長)

Cさんはデザイナーということだが、様々なデザイナーがいると思うが、端的には何の

デザイナーになるのか。

(C氏)

紙、ポスターやチラシなどのデザインになる。専門的な用語ではグラフィックデザイナーという分野になるが、デザイナーだけでは厳しく、出版社で編集とライティングのスキルを身につけていたので、その2つで今の仕事になっている。

(局長)

将来的には、デザイナーと編集を自分の生業として頑張ろうということか。

(C氏)

自分も東北出身で、東北をざっくり言うと、「東北ダサイな」というイメージがすごくある。イメージとしては、おばあちゃんが畑で収穫していて、のんびりしていていいよねというようなことを言われるが、でも実際は、畑の中や田んぼの横をハイヒールを履いて歩く女性がいてもいいのにと思っている。でもみんな遠慮したり、車で移動したりしていて、若い人がテンションの上がるものがないなど思っており、「いいじゃん、畑でもヒール履こうよ」という思いがある。なので、若い人に向けたデザイン、文字が多く、写真がいっぱいのポスターではなく、このイベントだったら行ってもいいかもと思ってもらえるようなものを作りたい。

先ほどまちづくりという話があったが、自分はまちづくりと言うと、「いやあ、私そんなまちづくりなんて」と思ってしまうというのが、若者を代表した正直な意見だと思う。

(局長)

言葉の持つ意味自体がハードルを上げているということか。

(C氏)

あと、とても言いづらいが行政の出しているポスターがダサイと思っており、そこに諦めている若者たちがどうなんだろうと思う。

(知事)

言っていることはよく分かる。自分も秋田市長のとき、県都400年のポスターを「け」と作った。アイデアの段階では秋田の地図と千秋公園の写真を使ったものなどがいくつかあり、「け」を選んだ。しかし権威のある一定の年代以上の人は「何だこれ」と全然受け付けない。ポスターは3種類作ったが、「け」だけが取り上げられた。当たり前だが、他はありきたりで面白くない。「あんべいいな」も、最初はひどく言われた。あれは梅原さんという超一流の方が考えたものだが、自分がこれでいこうと決めた。変わったものはなかなか理解できないのだろう。それを突破する誰かがいけばよいのだろう。

ただ、県南と県北では違いがある。県南はデザイナーが多く、結構地元で生業としている。県北は権威主義的なところが強い。いろいろなイベントで県南は挨拶は短いが、県北は来賓挨拶をする人が多い。そのような社会秩序があり、なかなかブレイクスルーできない。秋田市はある程度の都市なので、若者がしっかり話す。県北はなかなか難しい土地柄かもしれない。

ちょっと気になったが、地域おこし協力隊の全県の集まりはあるのか。

(事務局：移住・定住促進課)

全県の地域おこし協力隊の方を対象に年2回研修会を実施している。

(知事)

それは1日か、泊まりもあるのか。

(事務局：移住・定住促進課)

今年度は宿泊を伴う研修会を実施したいと考えている。

(知事)

泊まりがよい。

(局長)

それは元地域おこし協力隊でも参加できるのか。

(事務局：移住・定住促進課)

今年度はそのような方も絡めて開催できればと考えている。

(知事)

泊まりがけで、お酒も飲みながら話すのが良い交流となる。同じようなことをあちこちでやっているが、情報交換、横のつながりが必要だ。

(C氏)

地域おこし協力隊の任期が終わると浦島太郎のような気分になる。今までは竜宮城にいたように家賃や車など公的な補填があったが、任期終了と同時に全てなくなる。今がそうだが、すごいつらい時期だ。

(知事)

秋田県は地域おこし協力隊の任期満了後に残る人が少ない。お金だけの問題でもないようだ。20代や30代の方は将来設計をどうするか、Cさんはずっとここにしようと考えているのか。

(C氏)

生活できるだけ稼げるようであれば、住み続けたい。

(知事)

Dさんの所は、今午は何頭いるのか。

(D氏)

今は176頭、180近くいる。

(知事)

何人でやっているか。

(D氏)

従業員を含めて9人でやっている。

(知事)

かなり機械化していると思うが、それでもやはり人手はいるか。

(D氏)

機械化は進んではいるが、やはり人手は必要だ。今回牧草を刈っていて思ったが、いつ雨が降るか分からないので、やれるときに一気に集中してできるように人手を集めて行った。どんなに機械がよくても人手は必要だ。

(局長)

確かにそうだ。面積も大きい上に、限られた時間で乾燥までしなくてはならないため、とても仕事はハードだ。

(知事)

今、秋田県にはどのくらいの乳牛が飼育されているのか。

(局長)

4,300頭ぐらい飼育されている。酪農家は100人を切っていて、それぐらいしかない。Dさんのように若くて酪農をする方はとても貴重だ。

(局長)

他にもせっかくの機会なので、お互いに聞いてみたいことを是非聞いてほしい。

(C氏)

Dさんに質問だが、若い世代がいない酪農家の仕事に孤独を感じることはないか。

(D氏)

とても感じている。実際に新規で酪農を始めるのはかなり難しいのが現実だと思う。いかに減らさないかになるが、減る話しか聞こえてこない。

(局長)

先ほど、なぜ酪農をやる決意を聞いたかという、酪農家はどんどん減っており、なおかつ現在やっている方の高齢化も進んでおり、後継者問題も抱えている。そんな中でよく後を継ごうと考えてくれた。この先仲間を作るにも同世代の酪農家が少なく不安だと思う。その意味でもよくやっていると感じている。誰かを勧誘するとかしないのか。

(D氏)

そうしたいと、それしかないと思っている。

(知事)

アメリカとの関係もあるが、今牛乳の需要はどんな感じか。

(D氏)

伸びるといふか、需要は今後もあると思う。

(局長)

生乳はなかなか海外からは輸入しづらい。酪農家が減り、乳牛の飼育頭数も減る中で日本人の牛乳消費量はそれほど減っていないことから、大丈夫だと思う。

(知事)

土地の面積からはまだ拡張の余地はあるのか。

(D氏)

今年クラスターにより、飼育頭数を約倍の300頭にする所までは確保している。

(局長)

それにより、秋田県で一番の規模となる。

(知事)

畜産は作業は大変だが、農業の中でも意外と稼げる分野だ。稲作はあまり収入にならない。お米ほど収入が少ない農産物はない。最近畜産とネギは伸びている。白神ネギはしっかりブランド化された。いろいろな分野でも発想の着眼点が違うから、専門外の人が帰ってきて成功している例が結構ある。日本酒のネクストファイブのリーダー新政酒造の社長は仏文科を出て、お酒のことは全く分からず戻ってきたが、フランスのワインに着目して、フランスに持って行ったら評価され、一緒に曲げわっぱも持って行ったら、それも売れた。苦労はするが、大きく成功する人はその道の専門家でないケースがある。専門の人間は先入観に囚われてしまいがちだ。Dさんは臨床検査技師だから、衛生管理などでは人も動物もそれほど違わないので、発想など生かしていったらよい。

(B氏)

今の話になんかつながるが、農業、酪農、林業、漁業などの職業、つくる人がかっこいいと思ってデザインする人が、より多くの人に興味を持ってもらえるようなデザインをしてくれる人が秋田にも増えると思う。数は多くないが、帰ってきて活躍してくれると思うが、つくる人が減っていくというのが大きな問題になってくると思っている。結局つくってくれる人がいないとデザインもできない。そこでEさんに聞きたいが、製材や林業に絡んでいて、自分で家具を作りながら業界全体の応援をしている。銘青会も青年といいながら、もう年齢も上がってきて引退間際の方が多い中、若い人をどうやって入れるかということも何か考えているかと思い、是非その考えを聞かせてほしい。

(E氏)

自分が地元に戻ってきて活動し始めて、今本当に自分の中で課題だと思っているのが、若い人に出会う機会がなかなかないこと。今日は20代の方がいるが、能代では表だって活動している人が見えない。技術的な所で能代に木材高度加工研究所があるが、その教授の話などでも、世界的な流れで機械化され、機械化のレベルがどんどん高くなり、作り手は減るようだ。素人でも作れるようになるが、そうすると職人技が途絶えてしまう。自分はそれを残していきたいと思っており、手作り・手仕事の部分を残しながら、ブランド

を作りたいと思っている中で、やはり若い人を取り込んでいかなければと思っている。

林業や製材業がどんなことをしているか知らない人が大多数であり、いろいろな業種の人ともっとPRしていく必要を話している。また、高校生などが一度能代から出て、いつか戻ってきて木材の仕事がしたいと思う場づくりをしなくてはならないと、最近をよく話している。

ちょうどこのタイミングで能代市役所と美大と組んで、ちょっとした共有空間をリノベーションして作ろうという話があり、最初から高校生にも参加してもらおうと高校を訪問し、共感してくれる若い人と一緒に何かアクションを起こそうと動き始めたところだ。それが盛り上がり、自分たちのやっている事業をちゃんと見せていくことができれば、次に伝わるのかと思っている。その積み重ねの先に次があると思っている。

(知事)

林業は絶対数の違いはあるが、以外と後継者は農業よりいる。デザインの話があったが、林業者のことを英語でフォレスターと言い、フォレスター育成事業など言う。農家の場合は農家、林業家はフォレスター、こちらの方が格好よく感じる。また面白いのは映画では、昔の呼び方では木こりだが、皆英雄だ。シルベスタ・スタローンも役でよく林業をやる。いつも映画では林業従事者は体格もよく、最後は英雄になる。映画では農業は最後に虐げられる。農家の英雄は出てこない。県の林業大学校も制服がかっこいい。制服がかっこいいとそれも一つの評価となる。フォレスターは車の名前にまでなっている。その辺がデザインだ。

県内のある農地法人で作業服を有名なデザイナーにデザインしてもらったら、かっこよかった。そうするとそれに憧れて就職したいという子が来るという。今大工仕事は人が集まらないが、県内のある工務店で5人も採用した所がある。そこのシャツが全てマークも会社の名前も横文字で作っていて格好良く、それを着て歩くことが誇りなのだ。

給料だけでなく、格好良さやある程度休みがあるなどが、若い人材を引き込む。

最後に皆さんに一言ずつ、今から将来の夢を20年後どうなっていたいかをお聞きしたい。

(A氏)

まずはネギの作付面積をもっと大きくして、もっともっと出荷してきたいのは絶対だが、あとは若い人たちと一緒に農業をする。かわいい素敵な服を着て農業がしたい。そうやっていろいろな人が一緒に農業をしてくれたらよいと思う。アグリコッペの方も20年後にどうなっているか分からないが、コッペパンが一番人気なので、コッペパンを能代の名物にすることを目標にしていきたいと思う。

(B氏)

自営業を1年前に始めて、働いてみて、従業員を雇いたいと思ってきた。従業員を雇える会社にして、いい人と出会えたときに一緒に働こうと言えることはかっこいいと思った。20年後は従業員がいて、若い子が働いているような状況になっていけばいいなと思う。

また50歳になったとき、大工仕事など職人の仕事もできるようになり、デザインやコテージなどいろいろなものを若い子に教えられる人になっていきたいと思っている。

(C氏)

20年後、藤里町にやばいデザイナーがいるらしいと、町を代表する人になれたらいい

などと思う。また東京から打ち合わせに人が藤里町に来るデザイナーになりたい。燃費が悪いがカッコいい車に乗って、すごく派手な格好をしていますが、あれはCさんだからねと言われるような、そんな人になりたい。

(D氏)

今は300頭にする計画を進めているが、20年後、できれば5～600頭まで増やして、若い従業員を育てていけたらと思う。Cさんも言っていたが、いい車に乗って田んぼを回っていられたらと思う。

(E氏)

20年後には60歳になっている。自分はいろいろな所で話しているが、能代の街を木の香りのする本当の昔の木都の頃のような街になったらいいといつも話している。そうなら、たくさんあるやりたいことができたことになると思う。

(F氏)

自分は役者をやり、保育士をやって、今も別の仕事をしているように、結構好奇心が強く、いろいろなものに興味がある。その好きなものを仕事にできればいいなと思っている。それぞれ一本でいける人はすごいかっこいいと思うし、尊敬もする。しかし自分はいろいろな能力を身につけて、今は三種町をボクシングの街にするために動いているが、秋田県でもスポーツ立県として取り組んでいると思うが、ボクシングに関わらずリングをきっかけにしてボクササイズやヨガなど、温泉や海もあるので、合宿を誘致したいと思っている。ボクシングの街として、みんなが集まれる場所を作っていければいいなと思っている。スポーツとしてもボクシングジムを経営したりなど、保育士でもあるので、保育の問題にも携わりたいなど、いろいろやりたいことが多く、どうしようかと思っている状態なので、夢というより目標だが、自分のやりたいことでコツコツと一歩ずつ、稼げるようにやっていきたいと思っている。

知事総括

いくつかの課題もあるが、Dさんからあったいろいろな制度が分かりづらいという話は、県も含めて団体等へも制度が分かりやすいように改善していきたい。

それから、今日は人口減少や高齢化ということでマイナスのイメージがある中で、皆さんの話を聞いて、希望や夢を持って前向きに活動しているのは頼もしく感じた。まだ20代、30代ぐらいまでは失敗しても挽回できる。我慢せず、少しぐらい地域の人に言われても、きちんと発言して、地域に自分の考えを伝えて分かってもらう。そういう中でできるだけ良い関係で仕事を進めていけばよいと思う。

その点皆さんは話も上手で、経験もあり、才能・特技も持っているので、今日は非常に楽しい話ができただ。

人口減少は単に統計的に見て悲観しても始まらない。それはどうしようもないが、そんな中であっても、何でもよいので前向きにやろうという気持ちがあれば、そんなに悲観的になることはない。我々行政も、ともすれば悲観論で話がちで、確かに人口減少化においてどうやって市民生活を維持させていくかという難しい課題はあるが、やはり県民の希望をもっと引き出して、行政も一緒に動いていくことが必要だと改めて認識させてもらった。

今日は皆さんに励まされた感じだ。これからも皆さんと一緒に頑張っていきたいと思う、

本日はありがとう。(了)